講談社X文庫

時の輝き

：

折原みと

折原みと（おりはら・みと）
1月27日生まれ。水がめ座。B型。東京在住。
まんが家兼小説家。
'88年のデビュー作『夢みるように、愛したい』から『君と夢をみた』まで、講談社X文庫に19作品がある。

講談社X文庫

teen's heart

時の輝き

折原みと

●

1991年1月5日　第1刷発行
1995年3月1日　第22刷発行
定価はカバーに表示してあります。

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 編集部 03-5395-3507
販売部 03-5395-3626
製作部 03-5395-3615
本文印刷—豊国印刷株式会社
製本———株式会社 国宝社
カバー印刷—半七写真印刷工業株式会社

©折原みと　1991　Printed in Japan
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は，小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えします。なお，この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第四出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-190578-3　（文4）

講談社X文庫

時の輝き

●
●

折原みと

目次

時の輝き……5
あとがき……225

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

イラストレーション／折原（おりはら）みと

時の輝き

1

時の輝くさまを、見たことがあるでしょうか…？

ただ立ち止まっているだけで、通り過ぎていく〝時〟を、
感じることがあるとしたら、
それは、幸せなことなのか、
悲しいことなのか…、
あたしには、わからない。

――だけど一つだけ、確かなこと。

彼と過ごした、あの時間…。

あの、秋から冬にかけての短い時間。
あたしたちの〝時〟は、
確かに、――輝いていたんだ。

2

はじめて出会ったのは、中1の時。
2度目に会ったのは、高2の夏。

ねぇ、シュンチ。
再会は、本当に偶然だったね。
初夏の日ざしも届かない、暗い建物の中で…。
その冷たい場所に、きっと世界一似合わないお日さま笑顔を、3年ぶりに見つけたのは

「こら――っ、さとるくんっ！　待ちなさいっ!!」
パタパタパタパタ…
白い廊下を駆けていく、小さなパジャマの後ろ姿。
「こらっ！　さとるっ!!」
がしっっ!!
ワンパクな逃亡者の背中に、あたしは思いっきしタックルをかます。
「はなせよーっ。由花のブスっ！　ババァ!!」
「ババァですってー？　あたしはまだ16よっ。おねーちゃんと呼びなさいっ！　おねーちゃんと」
（も――っ、こんの生意気ぼーず!!）
思わず血管ぶちきれちゃうよっ。
…でも、怒らない、怒らない。
なんたって、あたしは〝天使〟なんですもの。
気高くやさしい〝白衣の天使〟。
今はまだ、――タマゴだけどネ♡

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あたし、神崎由花。16歳、高校2年。
明るくゲンキがモットーのピーカン娘！…だけど、元気すぎて、ちょっと落ちつきがないのが欠点。
私立明愛学園看護科で、ただいま看護婦めざして勉強中。
未来の〝白衣の天使〟候補生なんだ。
そいでもって今、あたしを〝ババァ〟よばわりした憎ったらしークソガキ…いやいやちがった、愛らしーおぼっちゃまは、あたしの初めての担当患者、村岡さとるくん、6歳のワンパク坊主。
え？　どうして学生のあたしに患者さんがいるかって？
よくぞ聞いてくれましたっ。
実はあたし、今、この東京郊外のS医大付属病院に、初めての看護実習にきてるんだよ。
7月はじめからの1ヵ月、S医大付属病院小児科担当。
あこがれの白い看護婦帽。
水色のストライプの実習着に白いエプロン、
この見習い看護婦さんスタイルは気に入ってるけど、看護実習はラクじゃなーいっ。
「由花のばかーっ。はなせっ。イジワルババァーっ!!」

小児科

…これだもんねぇ。
そりゃ、ワンパクざかりのこの年の男の子に、ベッドでおとなしくしてろっていうのも酷なハナシだけど、今は病気を治すため、
看護婦としては、心をオニにしなきゃね！
「ダメよ！　さとるくん。ちゃんと寝てなさいって医者も言ってたでしょ？　さっ、お部屋にかえろ」
「やだっ!!」
ドンッ！
「さとるくん!?」
身体に似合わないすごい力であたしをふりはらうと、さとるくんは隣の整形外科病棟のほうに逃げ出した。
「こらっ！　さとるくん、走っちゃダメだって…」
「べ――っだ」
「さとるくん!?」
（あ――…!!）
「危ない…!!」

…って、言いかけた時は遅かった。
後ろを向いて、あたしにべっかんこなんかしてたさとるくんは、前から歩いてきた男の人に、思いっきし衝突した。

ドッシン☆

――考えてみれば、これがキッカケ。
小さなワンパクキューピッドが、あたしたちを出会わせた。

「さとるくんっ!?」
（やっばぁぁ――いっ!!）
廊下にころがったさとるくんを、夢中で抱きおこす。
「さとるくんっ、だいじょうぶ？　ケガしてない？　どこも痛くない!?」
「へーきだいっ!!」
青くなってるあたしをよそに、さとるくんがゲンキいっぱいに答える。
（は――っ、寿命ちぢむわ――）
さとるくんの病気、ちょっとでもケガしたら命にかかわっちゃうんだから。

「も――っ！　心配させないでよぉ。だから走っちゃダメって言ったでしょー？」
（今度こそ逃がさないんだからねっ!!）
あたしは、さとるくんの手をがしっとつかんで、小児科病棟のほうへ歩きはじめた。
その時――――。

「ちょっと…、もしもしぃ？」
後ろで、気のぬけたような声がした。
（え…？）
ふり返ると、あたしと同い年くらいの男の子が、廊下に尻もちついてあたしを見あげてる。
「ひっでーなー、看護婦さん。オレだって一応、患者なんですけどぉ――？」
「あっ!!」
やだっ！　さとるくんがぶつかった相手のこと、忘れてたっ!!
衝突のはずみで側に松葉杖がころがってるトコみると、この人、足ケガしてるんだ。
ひゃ――っ、整形外科の患者さんかな。
「す…すみませーんっ!!　だいじょぶですか!?」
あわててその人の側に座りこむ。

助けおこそうとして顔をのぞきこんだ時、
あたしの目は、その人の顔にくぎづけになった。
（あ…れ？）

およそ病院には似つかわしくない健康的に日焼けした顔。
奥にいつでも笑いのタネを潜ませてるみたいな、明るい色の瞳。
（…ちょっと待ってよ。この顔…、もしかして――…）
半信半疑で、マジマジとその人をながめる。
相手の瞳も、何やらいぶかし気にあたしを見返していた。
「あ…のぉー…」
「ひょっとして…」
どちらからともなく、問いかけるあたしたち。
「……」

一瞬の、間。
――その後で…、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com